

患者の知りたい肝臓病教室のテーマに関する検討 —インタビューを行って—

キーワード：肝細胞癌 肝臓病教室 日常生活行動

B棟7階 ○神谷好美 奥谷有里 船城啓子

I. はじめに

A 病院は平成 20 年度に肝疾患診療連携拠点病院に指定された。B 科では肝疾患の患者・家族の QOL を向上させるために支援したいと考え、平成 24 年 12 月に入院中の肝疾患の患者・家族を対象に第 1 回肝臓病教室を開催した。教室の開催に向けて医師と連携、調整を行い、看護師間で講義内容、当日の時間配分、役割分担、患者・家族への周知方法などを検討し開催した。教室の開催は初めての試みであり、テーマは日々患者と関わる中でよく質問される内容の中から看護師間で話し合い、排便のコントロールの方法について講義を行った。B 科の肝疾患の患者の中でも肝細胞癌の患者は入退院を繰り返すことが多く、治療後は定期的に外来通院となり、日常生活は患者自身で管理しなければならない。川野らは「慢性疾患は治癒が難しく、生涯にわたりコントロールが必要であること、病気のコントロールは日常生活のあり方と深く関連していることから、患者自身が病気の性質を理解し、増悪因子を避け、望ましい生活ができるように、患者や家族に対して教育的支援をしていく必要がある」¹⁾と述べている。このことから日常生活において病気の管理に必要な情報を提供したり、患者自身で日常生活行動を管理することができるように支援していく必要があると考える。そこで今後、肝臓病教室を開催していく中で肝細胞癌の患者が日常生活を送る上で知りたいテーマ、困ったこと、不安なことや肝臓病教室に期待する

ことは何か実際に患者から聞き、それらをもとに肝臓病教室を開催したいと考えた。片山らは「慢性疾患患者に対する情報提供（肝臓病教室）について、医療者、患者とも殆どが必要であると考えていることが分かった」²⁾と述べている。このことから、肝臓病教室は患者にとってよい情報提供の場となり必要性があるといえる。文献検索において患者の知りたい肝臓病教室のテーマに関する先行研究はなかった。そのため今回患者のニーズに合った肝臓病教室を開催できるように患者が知りたいテーマや肝臓病教室に期待する共通のニーズを明らかにしたので報告する。

II. 研究目的

患者のニーズに合った肝臓病教室を開催できるように患者が知りたいテーマや肝臓病教室に期待する共通のニーズを明らかにし、今後の肝臓病教室に反映させることを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究対象

- 1) B 科入院中の肝細胞癌の患者
- 2) 第一回肝臓病教室に参加していない
- 3) 2 回以上入退院を繰り返している
- 4) 肝細胞癌であることを告知されている
- 5) child-pugh 分類 AorB の患者
- 6) コミュニケーションがとれる
- 7) 1)～6) を満たし研究の同意を得られた患者 10 人程度

2. 研究期間

平成 25 年 10 月～平成 25 年 11 月

3. データの収集方法

半構成的面接法

10 月～11 月に B 科入院中の肝細胞癌の患者 10 人程度にそれぞれカンファレンス室で 1) 日常生活で不安だったこと、2) 肝臓病教室に期待することについてインタビューを行った。

4. データの分析方法

- 1) インタビューの内容を逐語録に起こし、日常生活を送る上で不安だったこと、肝臓病教室で期待することを抽出する。
- 2) 抽出した内容の表現を統一しコード化する。
- 3) 内容を類似性のあるもので分類し、サブカテゴリー化し、そのサブカテゴリー化したものに共通の意味を見出しカテゴリー化する。
- 4) 分析過程において研究者間で吟味し、意味内容の違いはない。

5. 倫理的配慮

研究の趣旨、研究対象者が特定できないように配慮し、個人情報の保護に努めること、参加は自由意志であることを口頭・書面にて説明し了承を得た。また、インタビュー日は事前に患者と調整を行い、患者の負担とならないように時間調整を行った。また面接場所は個室としプライバシーの保護に努めた。なお、本研究は看護研究倫理委員会の承認を得た。

IV. 結果

1. 対象者の概要は表 1 に示す。

表 1. 対象者の概要

	年代	性別	家族構成
A 氏	60 代	女	4 人
B 氏	70 代	男	4 人
C 氏	80 代	男	2 人
D 氏	60 代	男	2 人
E 氏	60 代	男	3 人
F 氏	70 代	男	2 人
G 氏	50 代	男	独居
H 氏	50 代	男	4 人
I 氏	70 代	女	2 人
J 氏	50 代	男	4 人

2. インタビューの結果、日常生活において困ったこと、不安だったこととして 12 個のサブカテゴリーから 3 個のカテゴリーを抽出した。(表 2)

表 2. 日常生活において不安だったこと

カテゴリー	サブカテゴリー
状態悪化への不安	再入院に対する不安
	治療後の合併症に対する不安
	同病者の死
	予後に対する不安
退院後の日常生活の過ごし方	症状にあった適切な運動方法
	職場での付き合い
	症状出現時の対処方法
	服薬の困難さ
	食事に関する知識不足
疾患や治療の正しい情報の提供	正確な情報が分からない
	治療や疾患に対する説明不足
	入院環境と自宅における人的環境への違い

3. 肝臓病教室において期待することとして 6 個のサブカテゴリーから 3 個のカテゴリー

を抽出した。(表 3)

表 3. 肝臓病教室に期待すること

カテゴリー	サブカテゴリー
患者の経験した 症状に対する対 処方法	浮腫の対処方法
	掻痒感の対処方法
退院後の日常生 活における情報 提供	食事に関する情報
	歩行困難な場合の歩行方法
疾患や治療に対 する情報提供	癌の研究の最新情報
	症状チェックリストが欲しい

V. 考察

抽出されたカテゴリーをみると、日常生活において不安だったことと肝臓病教室に期待することは共通している点が多くあることが分かった。以下【 】をカテゴリーとする。日常生活において不安だったこととして【状態悪化への不安】は7名が述べていた。7名の患者に共通するのは慢性疾患をかかえた上での入退院を繰り返す中で自身の先の見えない今後の経過に対する不安だった。村山らは「各分野の専門家から情報を得ることで、患者はより深い知識を習得し、さらに安定した生活ができ、治療を継続することができる。これらを行うことで副作用症状出現の予期的不安の軽減に繋がるといえる」³⁾と述べている。病状の進行とともに状態悪化への不安は増強してくると考えられるため肝臓病教室において病状の進行や治療に伴う症状の説明を行うことで、患者が今後の療養生活をイメージし、自身の対処行動につながるきっかけとなり予期的不安が軽減されるのではないかと考える。日常生活において不安だったこととして【疾患や治療の正しい情報の提供】であると3名が述べていた。また、肝臓病教室に期待することとしても、同じように【疾患や治療に対する情報提供】を2名が求めている。

現代では様々な方法で簡単に情報を得ることができる。しかしその反面、情報が多くあり、患者が混乱する場合や、時には間違った情報を得ている場合もあった。肝臓病教室において、医療者から疾患や治療に対する正確な情報を提供することで、患者は正しい知識をもった療養生活を送ることが出来るのではないかと考える。また、間違った知識を得ている場合にはその間違いに気付くことができる機会になると考える。日常生活において不安だったこととして【退院後の日常生活の過ごし方】であると8名が述べていた。退院後の生活に対して不安があるため肝臓病教室に期待することとして【退院後の日常生活における情報提供】を5名、【患者の経験した症状に対する対処方法】を2名が求めている。加藤は「慢性疾患では日常生活における患者のQOLを長期間にわたり高い状態に維持することが、医療の大きな目標となる。そのためには、患者が病気を知ること、日常生活上の注意を理解することが不可欠である」⁴⁾と述べている。患者は生活環境が変化する退院後において自己管理していくことに対して戸惑いを強く持っていた。それらの戸惑いに対して患者自身の生活に繋がる食事や運動、内服管理、日常生活の注意点等を指導していく必要がある。医療者が患者の退院後の生活を見据えて指導を行っていくことで、患者の興味のある肝臓病教室を開催することが出来ると考える。インタビューでは食事や内服は家族に管理してもらっている患者もいた。村山らは「患者は今後長期的に治療していかなければならないため、家族も一緒に指導を受け治療を受ける患者をサポートしていけるような支援が必要である」⁵⁾と述べている。今後は家族のサポート状況も把握し、家族の意見も反映して退院後の生活を見据えて指導を行って行く必要があると考える。

VI. 結論

患者が知りたいテーマや肝臓病教室に期待する共通のニーズは①病状の進行に伴い出現してくる副作用症状、②疾患や治療に対する情報、③退院後の日常生活の過ごし方であることが明らかとなった。

VII. 引用文献

- 1) 川野雅資、他：成人看護学 慢性看護・ターミナルケア、株式会社日本放射線技師会出版会 p64、2007
- 2) 片山和宏、他：慢性肝疾患患者を対象とした肝臓病教室での情報提供に対する医療者および患者の意識調査に関する検討、肝臓、50 (7)、p356-361、2009
- 3) 村山圭美、他：ペグインターフェロン・リバビリン療法を受けた患者の3ヶ月の経験、成人看護Ⅱ、41、p238、2010
- 4) 加藤眞三：日常生活の指導：食事や運動に関する考え方、JCLS、23、p1065、2003
- 5) 村山圭美、他：ペグインターフェロン・リバビリン療法を受けた患者の3ヶ月の経験、成人看護Ⅱ、41、p238、2010